研究 No. 2118

住経験の語りに基づく住居観の抽出手法に関する研究

―住経験レポートの分析を通じて―

主査　柳沢　究[*1]
委員　池尻　隆史[*2]，水島　あかね[*3]，野村　理恵[*4]，野田　倫生[*5]

住経験インタビューの成果として制作された，テキスト情報および間取り図を含む住経験レポートを素材とし，インタビュー対象者の住経験の特性や傾向を平易に把握可能な住経験カルテの作成手法の開発を行う。分析の基礎となる住経験単位を定義し，キーワードによる特定行為の抽出と間取り図への紐付け，住経験単位を用いた定量的な関心傾向の分析，M-ＧＴＡによる特徴的な住経験の概念化による抽出等について，手法的検討を行う。また，それらの結果を統合した住経験カルテの全体像を提示し，その簡易な評価を行う。住経験カルテは，住環境の更新検討時における活用，また複数の対象者の比較分析ツールとしての利用が期待される。

キーワード：１）住経験，２）ライフヒストリー，３）住み方調査，４）居住体験，５）M-ＧＴＡ，６）関心分析

STUDY ON METHODS FOR EXTRACTING DWELLING UNDERSTANDING BASED ON NARRATIVES OF DWELLING EXPERIENCES

- Through the analysis of the dwelling experience reports -

Ch. Kiwamu Yanagisawa
Mem. Takashi Ikejiri, Akane Mizushima, Rie Nomura, Tomoki Noda

Using as material reports containing textual information and floor plans, which are the outcome of the 'dwelling experience interviews', this paper examines methods for producing an understandable summary version of the reports that shows the characteristics and trends of the interviewees' dwelling experience. First, the 'dwelling experience unit' is defined as the basis for the analysis, considering the method of extracting specific actions by keywords and tying them to the floor plans, the quantitative analysis of interest trends, and the conceptualization of the dwelling experience by M-GTA.

1. はじめに

1.1 研究の背景

〈住経験〉とは，ある人がこれまでにどのような家でどのように暮らしてきたかという，住まいと生活にまつわる経験をいう[文1)]。〈住居観〉には様々な捉え方があるが[注1)]，ここではその人が持つ，住まいと生活に関する価値判断基準の体系を指すものとする。住環境・住生活の更新時には居住者の住居観が強く作用する。本研究は，社会科学分野で蓄積のある経験学習モデル[文3)]を援用しつつ，住生活と住環境の相互応答の蓄積である住経験を，住居観形成の主要因と位置づける。「住経験→住居観→住環境／住生活→住経験」というサイクルの淀みない循環が，住居観と調和した住環境・住生活の実現に寄与する，というのが本研究の前提とする仮説である（図 1-1）。

1.2 先行研究の２つの困難と住経験インタビュー

住経験研究の嚆矢・西山夘三[文4)]は住経験の描写を通じて住環境と居住者の関係を考察しうることを示し，多木浩二[文5)]は経験が住まいに意味を与えることを理論化，鈴木成文[文6)]は建築学者の住経験から戦後住居の型の変容を論じた。これらの成果は本研究の前提である。建築

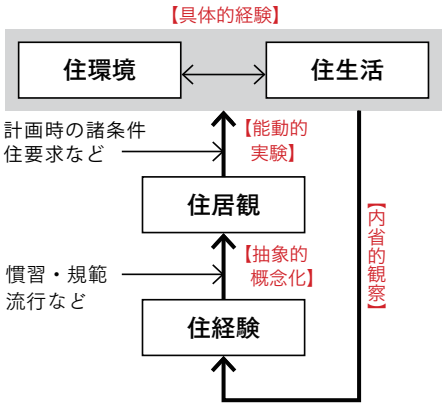


図 1-1〈住経験→住居観→住環境/住生活→住経験〉の循環モデル
【 】は Kolb（1984 文献３）による経験学習のフェイズを示す

*1 京都大学大学院 准教授・博士（工学）　*2 近畿大学 講師・博士（工学）　*3 明石工業高等専門学校 准教授・博士（学術）
*4 北海道大学大学院 准教授・博士（学術）　*5 京都大学大学院 修士課程

家自身がルーツとしての住経験を語る著作は少なくない[文7,8]。また，主にアンケートにより多数の対象者の住経験と住まいの選好傾向の関係を見る研究がある[文9,10]。

これらの先行研究は，住経験研究における２つの困難を示唆する。第一に住経験の詳細な描出には空間把握や作図等の建築学的素養が必要であること，第二にプライバシーに深く関わる住経験は他人に開示されにくいことである。そのため，具体的な空間と生活の関係を見るものは，いずれも対象が専門家自身の経験に限定される一方で，非専門家を対象とする研究では，住経験の内容が立地や住居形式等の外形的情報に留まりがちである。

この２つの困難を克服し，具体的な住経験を多数収集するために考案された手法が〈住経験インタビュー〉[文11]である。その手法的特色は，語り手と深い信頼関係にありかつ建築学の素養をもつ者が聞き手となることで，プライバシーの壁の超えた住経験への深いアクセス／テキストと間取り図による空間情報の詳細な描写／非専門家への対象者の拡大，を可能とした点にある。

１人の対象者への住経験インタビューの内容は１編の〈住経験レポート〉としてまとめられ，そこには語りを元に記述したテキストとこれまでに暮らした住居の間取り図[文2]が含まれる。研究資料としての利用にあたっては，個人情報を除去し匿名化したものを用いる[注3]。筆者らは2021年までに住経験レポートを約230編収集し，様々な分析を進めてきた[文12-17]。しかし，住経験レポートは情報量が豊富なため，対象者の住経験を詳細に理解することには適しているが，要点の把握や複数対象者間の比較分析にはかえって用いづらいという課題も明らかとなってきた。

1.3 研究の目的と概要

以上の経緯と問題意識から本研究では，住経験レポートから対象者の住経験の特性や傾向を大掴みに抽出し，平易かつ概覧性の高い表現フォーマット〈住経験カルテ〉として要約する手法の開発を目的とする。そのような住経験カルテを，住環境の更新検討時に活用すること，また様々な人の住経験を比較分析の俎上にあげるツールとして用いることが，本研究の大きな狙いである。

第２章では住経験レポートに含まれるテキスト情報の量的分析の基礎となる〈住経験単位〉を設定する。第３章では住経験単位を空間および行為と関連づける方法について，第４章では対象者の関心傾向の量的分析手法について，第５章ではM-ＧＴＡを用いたテキスト情報の質的分析による特性抽出手法について，それぞれ検討を行う。第６章では以上の結果を統合した住経験カルテの概要と対象者による簡易な評価について論じる。

2. 住経験単位の設定

2.1 分析対象テキスト

住経験レポートは大きく，「住居遍歴」「居住した住居の概要」「思い出の住居」「考察・感想」の４つのパートから構成される[注4]。「住居遍歴」は対象者の住んだ住居とライフイベントを年表形式で整理したものであり，「考察・感想」は聞き手による考察が中心となる。本研究では対象者と空間・生活との関係に注目するため，住居と生活に関する対象者の語りをまとめた「居住した住居の概要」と「思い出の住居」に含まれるテキストのうち，【空間情報】と【生活情報】と取り上げ，以降の分析における対象テキストとする[注5]（**図 2-1**）。

2.2 住経験単位の定義と抽出手順

対象テキストは，自由な形式で対象者の住経験を記述した無数の文から構成されており，まずはこれを一定の構造を持つ分析可能な形式に整える必要がある。本研究では住経験を，住環境と住生活から得られる感覚や意味といった情報と，それらに対する生理的・心理的な快／不快感，好き嫌い等の評価情報が紐づけられたものとみなす。その視点のもと対象テキストの量的分析を可能とするために，記述された住経験の最小単位＝〈住経験単位〉を，［場所］［属性］［評価］に関する情報の組み合わせとして定義する。［場所］は間取り図上で特定しうる空間・領域，［属性］は「空間の特徴」「用途・行為」「立地・周辺」「人間関係」に関する描写，［評価］はそれらに対する対象者の価値判断を示す記述である（**表 2-1**）。

住経験インタビュー：語り手（対象者）⇔聞き手
▼
住経験レポート：聞き手がインタビュー内容をまとめたもの
└〈住居遍歴／**居住した住居の概要**／**思い出の住居**／考察・感想〉

● テキスト
- 【基礎情報】住居の概要（所在地・居住期間・構造・階数・築年数…）や居住者の情報（家族構成や年齢・職業…）等を客観的に説明する記述
- 【空間情報】住居内外の空間や場所（＝間取り図上で特定しうる領域）に関する情報を含む記述（空間情報を除く）
- 【生活情報】住居内外における生活行為や習慣・風習等に関する情報を含む記述（基礎情報・空間情報を除く）
- 【その他】　上記のいずれにも該当しない記述

● 間取り図

図 2-1　住経験レポートに含まれる情報

表 2-1　住経験単位の定義と構成要素

情報種別	**1 住経験単位**
【空間情報】	**＝ 1［場所］・1［属性］（・1［評価］）** （例：寝室は・日当たりがよく・気に入っていた）
【生活情報】	**＝ 1［属性］（・1［評価］）** （例：家事を多く担当し・大変だった）
住経験単位の構成要素	
［場所］	間取り図上で特定しうる空間・領域に関する記述
［属性］	空間の特徴：［場所］の物理的・環境的状態に関する記述 用途・行為：生活行為や習慣、［場所］の使い方に関する記述 立地・周辺：住居敷地外の［場所］に関する記述 人間関係　：同居人や近隣住民との関係に関する記述 ※ 種別の異なる属性は１つの住経験単位は
［評価］	上記に対する価値判断に関する記述

対象テキストを住経験単位群に切片化する基本的な手順は以下のとおりである。具体例を**表 2-2** に示す。

①対象テキストを改行・句点を区切りとして原文へ分割する。異なる［場所］に関する記述は文の途中であっても分割する（例：**表 2-2** 中の#78 と#79。以下同）。

②各原文の情報種別（**図 2-1**）を判断し，【空間情報】と【生活情報】以外を除外する。

③［場所］［属性］［評価］に対応する語句を抽出し，住経験単位を定める。必要に応じ語を｛ ｝で補う（例：#87「風呂がなく」は家全体の［属性］であるため，［場所］として｛家全体｝を補う。#89 はレポート中で「気に入っていた点」という見出し下に記載されているため，［評価］として｛気に入っていた｝を補う）。

④原文に複数の［属性］［場所］［評価］が含まれる場合は，それらが単数となるよう単位を分ける（分配則。例：#83/84 の原文は，１つの［場所］に対し２つの異なる種類の［属性］を含むため，２単位に分ける）。

⑤各住経験単位に対象者毎の通し番号をふる。これによって，全ての住経験をインデックス化されたデータとして扱うことが可能となる。

3. 住経験単位を介した場所と行為の紐付け

3.1 住経験単位と間取り図との紐付け

住経験単位に含まれる［場所］と，住経験インタビューのもう一つの主要な成果物である経験した住居の間取り図上の位置とを結びつける方法について検討する。

図 3-1 は，ある対象者（19KD13）の１住居に関する住経験単位（空間情報）の一部を抜粋し，間取り図上で対応する室毎に整理したものである。実際には同じ部屋であるにかかわらず,［属性］の内容に応じて様々な［場所］の呼称がある。まずは，これらの［場所］の呼称の揺れを，間取り図上の具体的な領域に紐付けることで確定する。また［属性］の内容からは，当然のことではあるが，いずれの部屋も室名だけでは把握できない複数の行為の場となっていることがわかる。具体的な空間と生活行為を関係付けながら住経験の特徴を理解するためには,［属性］に含まれる生活行為に関する情報を，あわせて間取り図上に統合することが必要である。

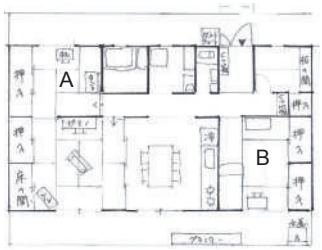
3.2 行為タグの設定

住経験単位の中から，特に生活行為に関する習慣や経験を抽出するための〈行為タグ〉を設定する。行為タグはあらゆる生活行為を扱いうるが，ここでは住居の平面計画時の条件設定に関わりが深いと考えられる行為７種を設定した（**表 3-1**）。行為タグは，各定義に該当する［属性］情報をもつ個々の住経験単位に付され，住経験単位中の［場所］情報を介して間取り図の特定位置と紐付けられる。ＳＮＳで用いられる＃（ハッシュタグ）と同様

表 2-2 ある対象者の３番目の住居（EB03-3）に関する住経験単位の抽出（抜粋）

レポート記載欄	原文	情報種別	属性種別	住経験単位 #	［場所］	［属性］	［評価］
時期	1960 ～ 68 年（28 ～ 35 歳）	基礎					
所在地	大阪府和泉市●●町						
立地周辺	農家が多い地域。	空間	立地・周辺	71	｛立地｝	農家が多い地域	-
	1965 年、長女のピアノを置く場所が欲しかったため、庭側に板の間を増築。		用途・行為	73	板の間	長女のピアノを置く場所が欲しかった	-
			空間の特徴	74		庭側に…増築	-
仕事等	対象者は内職として、三畳間でミシン仕事や刺繍をしていた。		用途・行為	75	三畳間	内職として…ミシン仕事や刺繍をしていた	-
就寝	対象者夫婦は居間に布団を敷いて就寝。			76	居間	布団を敷いて就寝	-
子供	二段ベッドは三畳間、			78	三畳間	二段ベッド｛を置いていた｝	-
	ピアノは板の間に置いていたが、			79	板の間	ピアノ｛を｝置いていた	-
食事	寝床が汚れるのが嫌だったことと		空間の特徴	82	寝床	汚れる	嫌だった
	台所に面していたことから、二畳間で食事していた。			83	二畳間	台所に面していた	-
			用途・行為	84		食事していた	-
他の部屋	風呂がなく、		空間の特徴	87	｛家全体｝	風呂がなく	-
	近くの銭湯に通っていた。	生活	用途・行為	88	-	近くの銭湯に通っていた	-
気に入っていた点	夫の仕事場や子どもの学校が近かった。	空間	立地・周辺	89	｛立地｝	夫の仕事場や子どもの学校が近かった	｛気に入っていた｝
	友人が堺の団地に住んでいたが、訪れてみると 1DK で狭かったので社宅のほうがマシだと感じた。		空間の特徴	90	社宅	｛友人の団地に比べると広く｝	マシだと感じた
気に入らなかった点	田んぼのある南側に窓がなく、採光がほとんどなかった。			94	田んぼのある南側	窓がなく、採光がほとんどなかった	｛気に入らなかった｝
	長屋のコミュニティ以外は農家や地主が多く肩身が狭かった。	生活	人間関係	96	-	長屋のコミュニティ以外は農家や地主が多く肩身が狭かった	｛気に入らなかった｝

｛ ｝：補足部　…：中略部



室	住経験単位［場所］	［属性］（［評価］は省略）
A	北の４畳半	ランドセルの置き場と簡単な机…をもらった
	自身の部屋	徐々に寝るようになり
	子ども部屋	友達が遊びに来たときと寝るとき
	子ども部屋	あまり使っていなかった
B	祖父の部屋	弟が就学以降１年半ほど同室となった
	南６畳	祖父と弟が同室で寝ることになった
	南６畳	母がアイロンがけなどの家事に使っていた

図 3-1　住経験単位の［場所］情報と間取り図の紐付け（CB13-3）

表 3-1 設定した〈行為タグ〉

行為タグ	定義
#就寝	就寝に関する記述
#食事	食事に関する記述
#子ども	子どもに関する記述
#接客	来客や宿泊など接客に関する記述
#イベント	冠婚葬祭や会合などに関する記述
#使わない	部屋や家具が使われないという記述
#ユニーク	その他、注目に値する空間の使われ方や行為に関する記述

に，行為タグはある行為に関連した住経験単位や間取り図上のポイントを収集・縦覧するためのキーワードであり，行為と空間の対応関係を可視化することを目的としている。

3.3 行為タグの間取り図へのインポート

住経験レポート所載の間取り図には部屋の使い方が書き込まれている場合もあるが，必ずしもテキストで記述された内容を網羅しているわけでないので，レポートから行為と空間の関係を読み取るためには，間取り図とテキストを往復し照合することが必要である。これに対し，ある住居における行為と空間との関係の要点をより簡便に概覧できるように，当該住居に関する住経験単位に付された行為タグ（**表 3-2**）を対応する間取り図上の領域に重ね合わせたものが，**図 3-2** である。

この住居は４軒長屋の１戸であり，６畳の居間の他は２畳・３畳ならびに増築部の板の間という，狭小かつやや変則的な間取りである。行為タグの付記により，就寝および食事の場所等とともに，子供の活動範囲が室Ａ（子供寝室）に留まらず，室Ｃ（居間）や室Ｄ（板の間）など家全体に広がっていたことを容易に理解できる。また，この事例では示されていないが，実際の行為とその行為を行うと想定されていた場所の齟齬（例えば，ダイニングと呼ばれる室が食事場所として使われていない状況）を視覚的に判別可能にすることは，行為タグが想定している大きな効用の一つである。

ユニークタグは，その住居における特徴的な住経験を端的に示すために設定した。例えば**図 3-2** の事例では，室Ａが現在では希な内職のための場であり，かつ対象者を含む子供の寝室とも共用であったこと，また，室Ｄが子供のためのピアノを置く専用の部屋として増築されたことをユニークタグによってマークしている。

3.4 行為タグを用いた住経験単位の抽出

行為タグのもう一つの活用方法は，同一タグを有する住経験を一括して抽出することである。住経験レポートは経時情報を含んでいるため，行為タグで住経験単位を抽出すると，その対象者の当該行為に関する経験の記述を一覧できるだけでなく，時系列に沿った変遷をも確認することができる。

１）「＃食事」による住経験単位の抽出例

ある対象者の住経験単位から，食事タグ（＃食事）の付与されたものを抽出した結果を**表 3-3** に示す。この事例では，住居２でハレとケに応じた食事場所があり，また住居４で朝昼と夜で食事の場を使い分け，住居５ではさらに夕食に居間と６畳間を併用していたことから，この対象者が複数の食事場所を使い分ける習慣を継続していたことが明らかである。現状＝住居６において食事場所がダイニング一箇所となっている理由をここから読み取ることはできないものの，上記の経験からは，対象者が現在も食事の場を使い分けたいという潜在的要求を有している可能性を指摘しうるだろう（もちろん加齢や間取り・家族人数の変化等に起因する可能性が否定されるものではない）。食事の取り方についても，初期は座卓，住居４からはテーブルを併用していることが指摘できる。この状況は以降も継続しており，対象者の習慣として定着していると推測できる。

このように，行為タグを用いて時系列に沿って住経験

表 3-2　住経験単位と行為タグ（EB03-3）

室	#	［場所］	［属性］（［評価］は省略）	行為タグ
A	75	三畳間	内職として…ミシン仕事や刺繍をしていた	#ユニーク
	77		子どもたちは…二段ベッドで寝ていた	#就寝 #子供
B	84	二畳間	食事していた	#食事
C	76	居間	布団を敷いて就寝	#就寝
	81		おもちゃで散らかることも多かった	#子供
	82	寝床	汚れる	#就寝
D	73	板の間	長女のピアノを置く場所が欲しかった	#子供 #ユニーク
E	80	家全体	子供たちは…遊んでいた	#子供
F	89	{立地}	夫の仕事場や子どもの学校が近かった	#子供

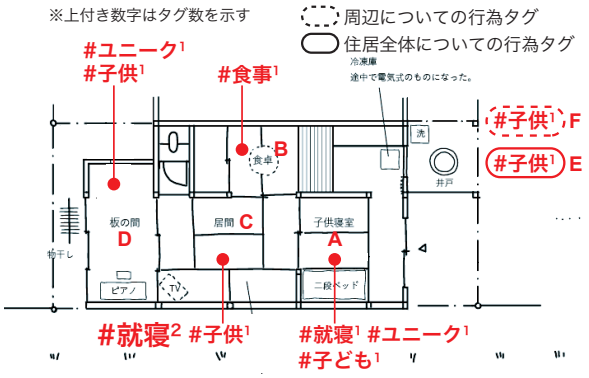


図 3-2　行為タグの間取り図へのインポート（EB03-3）

表 3-3　行為タグによる住経験単位の抽出例（EB03 #食事）

住居	#	住経験単位 ［場所］	住経験単位 ［属性］（［評価］は省略）
1	22	中庭に面した部屋	食卓を置いていた
2	55	台所に面した板の間	食事は…食卓を置いてとっており 11 人全員で食べることはほとんどなかった
	56	仏間	正月など行事の際は…集まって食べた
	57	次の間	正月など行事の際は…集まって食べた
	58	-	食事は義姉が作ることが多かった
3	84	二畳間	【座卓で】食事していた
4	106	ダイニング	朝と昼は…食卓で｛食べていた｝
	107	居間	晩は…折り畳みテーブルを広げて食べていた
5	137	ダイニング	朝と昼は…テーブルで｛食べていた｝
	138	居間	晩は…【座卓で】食べていた
	139	六畳間	晩は…【座卓で】食べていた
	187	居間側	食事や団欒をする
	192	-	食事中もテレビを見ていたし子供たちの好き嫌いを注意することもなかった。
6	161	ダイニング	食事はテーブルでとっている
	162	【ダイニングの】食卓の椅子	食事以外の時間も…いることが多く、読書やクロスワードをしている

【　】：本表のための筆者による補足

を整理することで,対象者の住み方の習慣や嗜好の特性・傾向（またはそれを理解するための端緒）を把握することができる[注6]。就寝タグや子供タグについても住経験の内容は対象者毎に様々であり，その分析は新たな住居の計画時の根拠として重要な情報となり得る。

２）「＃ユニーク」による住経験単位の抽出例

ユニークタグ（＃ユニーク）は，注目に値する対象者の特徴的な住経験を端的に指摘するものである。「注目に値する」ことの定義は厳密には設定しておらず，分析者の視点に依存する。そのため対象者をまたいだ比較分析というよりは，他の行為タグでは回収し得ない独特の生活習慣や珍しい住環境など，個人的背景に基づく住み方や考え方を理解する手掛りを捉えるためのツールとしての利用を想定している。ユニークタグの付与は対象者にとって自身の住経験に対する他者の評価付けでもあり，自らの経験を客観的に捉え直す上で有益なフィードバックとなりえる。

前項と同じ対象者の住経験単位から，＃ユニークの付与されたものを抽出した結果を**表 3-4** に示す。住居１・２では，住居内にＬＤＫ型住宅の構成に当てはまらない多様な空間が存在し住みこなしの工夫があったこと，家族以外の居住者が出入りしていたこと，職住一体住居の特有の雰囲気があったこと等を注目点として挙げている。住居４・５では，対象者の独特の嗜好として模様替えに関する経験に注目している。

これらの経験が将来の住宅の検討時に計画条件となるか（あるいは些末な情報として捨象されるか）は，この分析段階では判断し得ないものの，少なくとも一度は考慮されるべき情報の目録として，重要な意義を有するだろう。また，このような情報を他者が閲覧できる形に整えることは，個々人の経験では知り得ない多様な住まいや住み方を認識する機会を提供することにもつながる。

4. 住経験単位を用いた量的分析

住経験インタビューでは，家具の配置や部屋の設えを詳しく語る対象者がいる一方で，建築や空間についてはあまり触れず，立地や周辺環境について多く語る対象者もしばしば見られる。インタビューにおける語りと，それを聞き手がまとめたレポートの記述とを同一視することはできないが，ここでは，記述の内容とその多寡は対象者の関心の所在や強度をある程度反映していると仮定した上で，住経験単位の量的分析を通じて，対象者の住環境と住生活に対する関心傾向の概略を把握する手法を検討する。

具体的には,「住環境の構成要素」と「生活行為」の２つの観点から分析項目[注7]を設定し，各項目に該当する記述の量＝住経験単位数を集計することで，対象者の関心傾向を把握することを試みる。集計結果は直感的な理解を重視しレーダーチャートを用いて可視化する。

4.1 関心傾向の分析項目の設定

１）住環境の構成要素への関心

対象者の関心が住居のどの部分に向けられているかを明らかにするため，スケールの異なる住環境の構成要素を分析項目として設定し[注8]，各項目に該当する住経験単位数を集計する(**表 4-1**)。

①家具・設備には，タンスや机等の家具，洗濯機や冷蔵庫等の機器類に関する記述，②部位・部材には，住居を構成する柱や壁・床等の部位およびその材料・仕上げ・造作等に関する記述が，それぞれ該当する。③空間の形質は，住経験単位の含む［場所］について「広い／天井が高い／開放的な」等，空間の形や質に関する修飾表現を伴う記述である。④環境条件は，③と重なる場合もあるが，住経験インタビューで頻繁に語られる話題であるため別項目とした。⑤外回りは，住居の外観や庭・植栽・塀・門等の屋外要素，また前面道路や隣接家屋など敷地内外の状況に関する記述であり，⑥立地は，「緑が多い」

表 3-4　ユニークタグによる住経験単位の抽出例(EB03 #ユニーク)

住居	#	住経験単位 ［場所］	住経験単位 ［属性］｜［評価］
1	16	向座敷	女中さんが泊まる際は…寝てもらっていた
	20	北側に渡る濡れ縁	飛び移る必要があった
	43	{濡れ縁に}面した部屋	寝ていた｜よく寝られたと今になって思う
2	48	醤油蔵	職人さんが６人くらい通いで来ていて、夫とともに…作業していた
	61	玄関横の棚	醤油瓶を並べていた
3	96	-	長屋のコミュニティ以外は農家や地主が多く肩身が狭かった
4	111	家の前	ソファが邪魔になるので…出していた
5	127	-	模様替えが好きで家具をよく動かしていた
5	194	-	模様替えが好きで、昼間一人でいるときに大きめの家具を動かすこともあった

表 4-1　住環境の構成要素への関心の分析項目

構成要素	住経験単位の記述内容	スケール	
① 家具・設備	住居内の家具や家電、住宅設備機器など	物品	住居内部
② 部位・部材	住居内の各部の材料・仕上げ・造作など	部分	
③ 空間の形質	空間の形状や質に関する描写・評価	室～全体	
④ 環境条件	日当たり・風通し・寒暑・明暗・音など		
⑤ 外回り	住居の外観・外構・敷地周囲の状況	敷地	住居外部
⑥ 立地	まち・集落・都市レベルの環境や地域性	都市	

表 4-2　生活行為への関心の分析項目

生活行為	住経験単位の記述内容
① 家族生活	団らん・食事（一人で行う場合も含む）など
② 生理・衛生	入浴・洗面・排泄など
③ 家事作業	調理・洗濯・アイロンかけ・掃除など
④ 移動・収納	出入り（玄関）・通行（廊下・階段）・収納など
⑤ 個人生活	休養・睡眠・趣味・勉強など（複数人で行う場合も含む）
⑥ 社会生活	接客・仕事（家業・在宅就業を含む）・冠婚葬祭など

※非血縁の同居人（女中・住み込み従業員・下宿人…）の生活に関する記述は⑥に含む

「閑静な住宅街」「交通の便がよい」といった，⑤よりも広い範囲の周辺状況について言及するものである。

２）生活行為への関心

第３章において，就寝や食事などの住居の計画上重要な行為を視点とする分析を行ったが，以下では，より広範な生活行為に関する対象者の関心の傾向を捉えることを試みる。住居内で営まれる生活行為の５分類[注9]に，「社会生活」を加え，各項目に該当する住経験単位数を集計する(**表 4-2**)。

ある住経験単位がどの生活行為に該当するかは，場所や行為主体の人数に関わらず，行為の内容から判断する。例えば，食事に関する記述は，家族と一緒の場合も一人の場合もあるが，いずれも食事という行為に関する関心の表れとして①に数える。同様に，集中就寝に関する記述は就寝行為として⑤に含める。なお，教科書にも示される①～⑤の行為分類は明らかに給与生活者の核家族世帯を想定するものであり，職住一体の住居や下宿・シェアハウスといった居住形態において生じる多様な行為を扱うことができない。そのため，接客や在宅ワークなども含む，非血縁の同居者や社会との接点をもつ種々の行為を「⑥社会生活」に分類した。

4.2 関心傾向の量的分析結果の例

上述の分析項目に基づく分析結果を，世代・出身地・経験住居数の異なる３人の対象者の住経験レポートを例として，結果を図示したレーダーチャートを示しながら概説する(**表 4-3**，**図 4-1**)。あわせて住経験単位の具体的内容を参照し，分析結果が対象者の関心を適切に反映しているかを確認する。各分析項目の値は，各対象者の住経験単位の総数を母数とした，その項目に該当する住経験単位数の割合を示す。グラフの囲む面積は記述量の多寡，すなわち「住環境の構成要素」あるいは「生活行為」への全体的な関心の程度を，おおよそ表している。

１）住環境の構成要素に関する関心傾向

対象者Ａは，①家具・設備への言及割合が高いのが特徴である。住経験単位の内容を見ると，例えば，食事の状況について，「[ダイニング] 朝と昼は食卓で」「[居間] 晩は折り畳みテーブルを広げて食べていた」([ ] は当該住経験単位中の［場所］情報を示す。以下同）というように，食事をとる場所だけでなく，用いていた家具の情報が添えられている。就寝の状況についても，対象者夫婦は「[居間] 布団を敷いて就寝」，子どもたちは「[三畳間] 二段ベッドで寝ていた」など，布団やベッドといった寝具への記載が詳細にある。また別の部分では，「模様替えが好きで家具をよく動かしていた」という記述も見られる。このような，家具や物材の配置に関心が高い（また，それに関する記憶が比較的鮮明である）という対象者の特徴を，グラフは表しているといえる。

対象者Ｂは，③空間の形質や⑥立地に関する言及割合が比較的高い。「かなり古く，修繕もままならない町屋であった」という思い出の住居を筆頭に，「{兄弟が大きくなるにつれ，家がどんどん} 狭くなっていった」というような広さや古さに関わる記述が大半を占める。また，「[縁側がある裏庭] 板塀を挟んですぐに隣家（長屋）と接していたため，パブリックの境界が曖昧だった」のように，町家ならではの空間構成の特徴についても触れられている。就職後には「職場(大学)からは車で 20 分」など，職場への通勤環境の言及が必ずあり，また住居が変化する度に，その地域の概要や「街全体が自然に彩られていて美しかった」といったまちの印象が紐付けられている。壮年期には「基本的には朝から晩まで大学にいるという暮らしだった」「あまり住居に対する記憶や思い入れがない」という表現もあり，住居内よりも立地や外観・外回りへの関心が強いという傾向が表れているといえる。

対象者Ｃは，Ａと同様に①家具・設備の割合が高く，「[ベランダ] 洗濯機がおいてあり，洗濯→洗濯干しまでスムーズにできて便利であった」といった家事と結びついた詳細な記憶が語られている。また，⑤外回りについても多く言及されている。「[敷地入り口を入ってすぐ] 椎の木は，樹齢何百年らしく，家族の自慢だった」「[庭] 造園を営んでいる親戚に作ってもらった」等，敷地内の樹木や庭の造作などにも意識が向けられていることが，記述からも確認できる。

２）生活行為に関する関心傾向

生活行為に関しても同様に，レーダーチャートを示しながら３人の対象者の分析例を概説する(**図 4-2**)。

対象者Ａは，⑥社会生活に関する割合が高いことが特徴的である。「{戦争前は女中さんも３人ほど来ていて} 掃除や子守りをしてくれた」といった時代的な状況や，「[醤油蔵] 職人さんが６人くらい通いで来ていて，夫と

表 4-3　分析事例の対象者概要

対象者	生年	性別	主な居住地	住居数	住経験単位総数
A (EB03)	1932	女	兵庫・大阪	6	221
B (EB08)	1950	男	京都・愛知・栃木・カナダ・大阪	10	203
C (EB11)	1940	女	千葉・東京	7	229

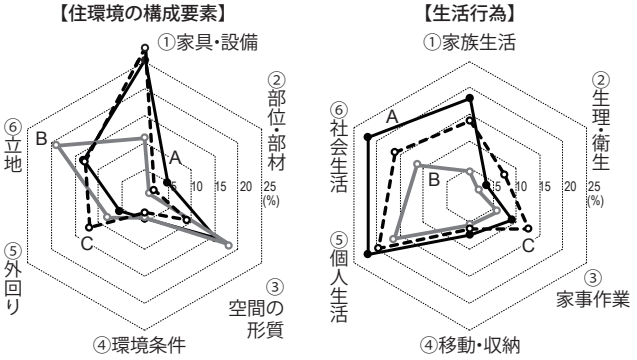


図 4-1　関心傾向を示すレーダーチャート

ともに作業していた」「[応接間の玄関側] 来客のスペース」「[応接間のたばこ店側] 事務仕事のスペースになっていた」といった，敷地内に生業に関する空間があることで頻繁に家族以外の人々が出入りしていた暮らしの様子が語られている。また，結婚後，団地生活になっても「([居間] [四畳半] 来客があったときは布団を敷いた」「親戚や知人が大阪に来たときによく宿泊場所に使われていた」「人を呼ぶことが好きで，友人や親族をよく招いていた」という思い出を語るなど，自宅に他者を招き入れることが日常的な行為として捉えられている。これら職住一体の住まいや来客の多い生活の経験が，グラフに反映されているといえる。

対象者Ｂは，生活行為に関する住経験単位数が全体的に少ない。しかしその中では，個人生活の割合が家族生活に比してかなり高いことが注目される。記述の内容を確認すると，幼少期に「兄弟３人とも部屋をもてなかった」という経験にはじまる，各住居における個室の有無や状況に関するものが主である。対象者自身の住居観を反映したという注文住宅についても，「{自宅には自分はあまりいないことを見越し,}自室(納戸と呼んでいた)は最も小さくした」と語っており，自室やプライベート空間のあり方に関する意識の高さが伺われる。

対象者Ｃは，他では最も割合が低かった②生理・衛生や③家事作業も一定数あり，項目間の偏りが比較的小さい。住経験の内容としては，特にトイレについて「[トイレ] 外にあるので夜は怖かった」「兄弟を起こして一緒に行かないといけなかった」といった幼少期の経験から，その後の住居についても「[トイレ] 家の中に入り {便利になった}」といった生理・衛生設備が内部化していく様子が鮮明に語られている。他にも「[お風呂・洗面・トイレ] 誰かがお風呂に入っているとトイレに入りづらかった」といった各設備の使い勝手に関する思い出が繰り返し述べられている。家事作業については，「[土間] 父親が（ホーロー鍋で）茶の乾燥をさせたり，餅つきをしたりと，作業場として使われていた」「家族の中で掃除担当だった」「[廊下] 雑巾がけは大変だった」といった幼少期の農家住宅において家族総出で家事をしていた様子に加え，結婚後にも「{自分は専業主婦で} 家事や子育てを繰り返す毎日」といったように，家事行為へ関心が一貫してあることが伺える。

4.3 関心傾向の量的分析結果のまとめ

住環境の構成要素については，対象者の年齢や家庭における役割・職業・居住地・経験した住居数等に起因する関心傾向の個人差が，おおむね適切に抽出されたといえる。主婦としての日常生活が経験の中心にある対象者ＡとＣでは，住宅内外での家事・育児に関わる関心が強く，対して職場で過ごすことが多かった対象者Ｂでは，住宅の立地に関する強い関心が抽出された。一方，同じ主婦であっても，模様替え等を好む対象者Ａと，庭など外回りの印象を強く持つ対象者Ｃといった，個人的な習慣や嗜好性の違いを読み取ることができることも示唆された。空間の形質が共通して突出しているのは，インタビューを通して間取り図を描くという住経験インタビューの手法上の特徴を反映したものと考えられる。部位・部材に該当する言及は少ないが,その内容を確認すると，縁側や屋根など伝統的住居の部位や和室の建具に関連した記述が目立つ。これらが時代的な傾向あるいは個人的関心によるものかは，さらなる検討を要する。

生活行為については，インタビューでは就寝や食事といった基本的事項を確認するため，家族生活や個人生活の割合が高くなりやすい。特に個人生活については，家族の人数に応じて記述が増えやすいことに注意がいる。他の項目に関しては，対象者の背景や状況に応じた関心の強度がある程度反映されているといえる。

5. 住経験の概念化による質的分析

5.1 M-ＧＴＡを用いた住経験の分析の概要

量的分析においては，繰り返し言及された住経験が注目されやすいため，記述量は少ないが重大な経験が取りこぼされる可能性がある。また，住経験単位への切片化による文脈の捨象は免れえない。このような量的分析の限界を補い，記述の具体性・全体性を保ちながら住経験の特性・傾向を抽出するために，テキストデータを対象とした質的研究法であるM-ＧＴＡに依拠した住経験レポートの分析手法を検討する[注10)]。

本研究では，M-ＧＴＡに則った分析テーマとして「居住者と住環境との相互作用による住経験の形成プロセス」を，データ解釈を行う際の視点となる分析焦点者として居住者＝住経験インタビュー対象者を設定する。一般的なM-ＧＴＡの分析では,分析焦点者の視点から分析テーマに沿ったデータ解釈を行うために独自の「概念」を生成し，各概念の相互関係を構造化することでプロセスの理論モデルの構築を目指す。ただし本研究では，この手順に沿った分析を行うためにさしあたり上記分析テーマを設定するものの，結論としてのプロセスの理論モデル構築よりも,その過程において行う概念生成を重視する。無数の記述の中から，対象者の習慣や嗜好を反映した意味ある住経験のまとまりを抽出することを，研究の当面の目的とするからである。

5.2 特徴的な住経験の概念生成

M-ＧＴＡに沿った住経験の質的分析では，まず複数の対象者の対象テキストから特徴的な住経験を概念化し，概念のリストを作成する。個々の対象者のカルテ作成にあたっては，このリストに照らして，その対象者の特徴

的な住経験を抽出する。概念を生成する具体的な分析手順は以下の通りである。

①分析の前提として，個々の住経験は居住者と住環境との相互作用を通じて生じるものと考え，**図 5-1** に示すモデルを仮定する。この「習慣」「印象」「改変」のいずれかに該当することを，手順②において具体例として着目する記述の基準とする。ただし，「食卓で食事をとる」「自室で就寝する」といった，現代日本においてごく一般的とみなしうる経験は，住経験カルテに記載する必要がないと判断し，分析から除外する。

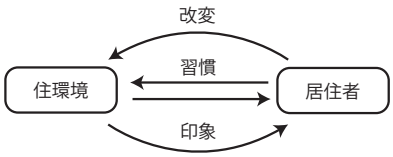
②複数の対象テキストを読み進めつつ，分析テーマと分析焦点者に照らし，また上述の**図 5-1** のモデルをふまえ，重要と思われる住経験の記述を具体例として抽出，他の類似した具体例も説明できるよう抽象化し，概念を定義する。

③その概念に類似する具体例を他の対象テキストからも探す。少なくとも複数対象者において確認できない場合は，その概念は有効でないと判断する。

④あわせて対極的な具体例が存在しないかを確認し，概念生成が恣意的に偏ることを防ぐ。

⑤上記と並行して，必要に応じて新たな概念生成と検討（②～④）を繰り返す。

表 5-1 は〈開かれる建具〉という概念を生成した際のワークシートの例である。住経験インタビューでは，襖や扉といった建具を開放したままの状態で部屋を使用する生活の様子がしばしば語られる。これを対象者の空間の使い方の「習慣」を示す記述とみなし概念化したものである。表中の具体例欄には，複数のレポートに見られたこの概念の具体例となる記述が記載されている。



習慣：一定期間継続された住環境の使い方、およびそれに関連する意識
印象：住環境に対する好みや不満、記憶に残っていること
改変：住環境に働きかけ変化を及ぼすこと

図 5-1 概念生成にあたり仮定する住経験の発生モデル

表 5-1　概念生成に用いた分析ワークシートの例

概念名	**開かれる建具**
定義	建具を開けたままの状態で空間を使用すること
具体例	①ダイニング奥の和室は対象者と夫の寝室であり、寝るとき以外はふすまが開けられていて、ダイニングと合わせて一繋ぎの部屋になっていた。 ②夏場は暑いので中庭、廊下、和室六畳間までを一続きにして、庭に大きな床几を置いてその上で寝る人、廊下で寝る人、和室の蚊帳の中で寝る人、に分かれて寝ていた。 ③ここの襖はたいてい開けていて、来客が泊まる際は居間からつづけて布団を並べた。 ④居間と六畳間の間の襖は開けていることがほとんどで最終的には外した。 ⑤ふすまはとって 2 部屋の和室をワンルームにしていた。 ⑥南棟の座敷はつなげて大広間とし、葬式などの行事を行っていた。 ⑦南と西の戸は開けっ放しにでき、廊下を縁側のように使っていた。
理論的メモ	②→暑さの緩和のために行っている ②⑦→屋外へ開放している ④⑤→建具を取り外している ③⑥→来客・イベントに関連 **対極例：**部屋を分節して使用する。（建具を閉じての使用はごく一般的な経験とみなす）

5.3 住経験レポートに見る特徴的な住経験

1）27 編の住経験レポートから生成した概念リスト

2021 年度に書かれた住経験レポートのうち 27 編を対象として，上記手順に従い生成した 57 の特徴的な住経

表 5-2　27編の住経験レポートから生成された概念

	概念名	*
空間の使い方・使い分け	空いた部屋の活用	習
	使わない部屋	習
	入らない部屋	習
	持て余すスペース	習
	ものに囲まれる	習
	ものは少なく	習
	開かれる建具	習
	塞がれる動線	習
	開口部でつながる	習
	イベント時の特別な使いかた	習
	動線の使い分け	習
	数段階のパブリック	習
	あれもこれもここで	習
住環境や生活のその他の特徴	そのための場所	習
	くつろぎの空間	習
	生活様式の継続	習
	使い慣れたものを使う	習
	同居人の影響	習
	店や工場のある家	習
	一室で仕事	習
	複数住居での生活	習
	動物がいる暮らし	習
	外にある水回り	習
	土間での暮らし	習
	屋根・屋上にて	習
	災害への対策	習
	自然との関わり	習
食	複数ある食事場所	習
団	囲んで団らん	習

	概念名	*
就寝	あちこちで就寝	習
	一緒に就寝	習
子供	敷地周辺の遊び場	習
	家で遊ぶ子供たち	習
来客	居住者以外の日常的出入り	習
	客は来ない	習
	地域とつながる空間	習
プライバシー	プライベート空間の共有	習
	ひとりの居場所を	習
	居住者の生活の気配	習
	近隣への気遣い	習
	周辺環境とプライバシー	習
空間の印象	部屋間のアクセス	印
	暮らしやすさと空間の形状	印
	印象的な音	印
	採光への意識	印
	温熱環境への意識	印
	衛生への意識	印
	印象的な眺め	印
	意匠への意識	印
	出来事と結びつく空間の印象	印
空間への働きかけ	庭の積極的活用	改
	すきま空間の活用	改
	増改築による対応	改
	家具の移動・配置による対応	改
	自分たちでつくる	改
	住空間の緑化	改
	光を遮る	改

＊基準：習＝習慣・印＝印象・改＝改変

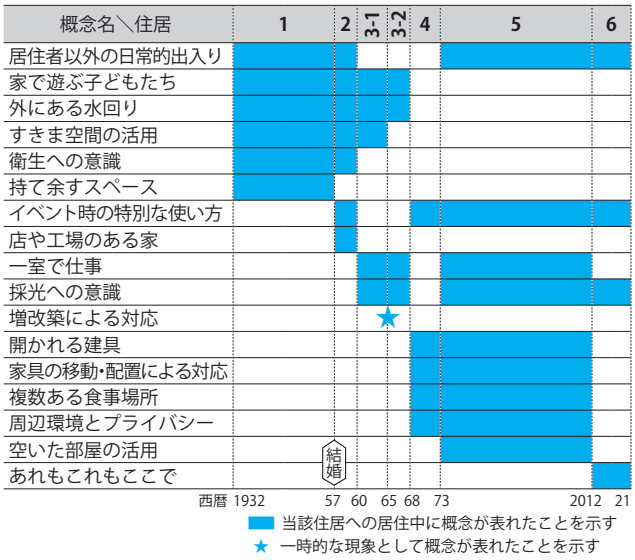


図 5-2　ある対象者の特徴的な住経験と住居履歴の対応
（EB03 抜粋）

験の概念リストを表 5-2 に示す。

〈外にある水回り〉〈土間での暮らし〉などは，概念名のとおり，経験した住環境の特徴が影響した生活習慣が概念化されたものである。図 5-1 のように相互関係を想定したことで，同じ場所を様々な用途で頻繁に使う〈あれもこれもここで〉や，階段裏や廊下のつきあたりといったスペースを有効に使用する〈すきま空間の活用〉のように，居住者が住環境に対して行う選択や働きかけといった住みこなしの経験も,概念として生成されている。

なお，M-ＧＴＡの概念は，あくまで具体例に基づき生成されるものであるため，表 5-1 は想定しうる特徴的な住経験を網羅するものではない。また，対象者の集団は大学生／院生の親・祖父母である等のサンプルとしての偏りをもつため，生成された住経験概念にも当然何らかの偏りが生じている可能性がある。そこで，手法を逸脱しない範囲で予想できる住経験概念を補うべく，対極例をも説明できるように定義を拡張する等，適宜生成された概念の再検討を行っている[注 11)]。

２）ある対象者の特徴的な住経験概念

ある対象者について確認された特徴的な住経験の概念の一部を,住居履歴とあわせて図示したものが図 5-2 である。この概念のリストは，対象テキスト上の様々な箇所に散在していた特徴的な住経験を概念化により集約し，対象者の住経験の特性を要約的に示すキーフレーズ群へと抽象化したものといえる。さらに，各概念とその舞台となった住居とを対応させることで，概念の登場した時期や継続期間を容易に理解することが可能となる。

例えば図中の〈居住者以外の日常的出入り〉は，大半の住居において断続的に出現しており,〈イベント時の特別な使い方〉も比較的多くの住居に該当する。〈店や工場のある家〉〈一室で仕事〉のように，職住の近接した生活様式がその一因だろう。〈家具の移動・配置による対応〉は来客時の対応とも関連する。以上は量的分析結果とも合致し，家具への意識や非居住者の出入りは，対象者の住居観を説明する重要な要素であると予想できる。量的分析には表れていないが,〈採光への意識〉も複数の住居で見られ，古い住居のみで登場する〈衛生への意識〉よりも対象者にとって重要度が高いことが推測される。その他,〈複数ある食事場所〉や〈開かれる建具〉などの住み方の傾向を伺うことができる。

6. 住経験カルテの試作と評価

6.1 住経験カルテの全体構成

これまで検討してきた手法を用いた分析結果を統合することで，住経験カルテを制作する。住経験カルテの目的は，冒頭に述べたように，住環境の更新検討時における活用，また複数の対象者の比較分析ツールとしての利用を想定し，対象者の住経験の特性や傾向を抽出・要約することにある。図 6-1 に１人の対象者を例とした，住経験カルテの全体構成を示す（一部図版・情報はダミーを使用)。平易さと概覧性を重視し，情報は基本的にグラフ・表または箇条書きの形式でまとめることとする。原則として，記載内容は全て住経験レポートの記述にのみ依拠し，補足調査等は行わない。不明の情報は空欄とする。閲覧は基本的にウェブブラウザを利用し，記述形式は構造化およびシステム間連携を重視しＸＭＬを用いることを想定する。今のところ住経験カルテは，大きく８項目から構成される。各項目の概要は以下のとおりである。

(1) 基本情報：当該住経験カルテの資料情報を記す。対象者はデータ管理コードで表される[注 12)]。住経験レポート制作者＝住経験インタビューの聞き手の属性として，対象者との関係や生年・建築的素養に関する情報を付記する。

(2) インタビュー対象者について:語り手であり住経験カルテの主体となる人物に関して，住経験の解釈に必要と思われる最低限の情報を，住経験レポートから抜粋する。「生家について」は，対象者の子供時代の家庭環境の概要を示す目的で設けている。

(3) 住居遍歴：住経験レポート中の「住居遍歴」パートの要約である（子供期・独身期・既婚期の別は文献 13 による)。住居遍歴の年表はレポートより転載する。

(4) 各住居の間取りと行為：本稿 3.2 で検討した分析内容に相当。行為タグと間取り図を重ね合わせた図版を，各住居について記載する。

(5) 行為タグによる住経験単位の抽出：本稿 3.3 で検討した分析内容に相当。行為タグ毎に抽出された住経験単位の一覧を示す。

(6) 住経験単位を用いた量的分析:本稿第４章で検討した分析内容に相当。「住環境の構成要素」「生活行為」の２つの視点から，対象者の関心傾向グラフを示す。

(7) 特徴的な住経験:本稿第５章で検討した分析内容に相当。対象者の住経験レポートに見られる特徴的な住経験の概念リスト，および，それと住居との対応関係を示す。

(8) カルテ制作者による所見:本稿における各分析の考察に相当。分析結果から読み取ることのできる，対象者の住経験の特徴・傾向を概括する。

6.2 対象者自身による分析結果の評価

本稿で検討した分析手法の妥当性評価の一環として，インタビュー対象者１名の協力を得てヒアリングを行った。量的分析結果として住経験カルテ（6）3.のレーダーチャート２点，質的分析結果として（7）の一覧表，および（8）からそれらに関する考察を，対象者に提示した。対象者は高齢であり，また建築の専門家ではないため，

（1）基本情報

1. 住経験インタビュー対象者：EB03　※ 管理コード
2. 住経験インタビューの実施時期（所要時間）：202X 年7月（8時間）
3. 住経験レポート制作者：対象者の孫・199X 年生・大学院生（建築）
4. カルテ制作日：2022年10月30日 ／ 5. カルテ制作者：○○ ○○

（2）インタビュー対象者について

1. 生年：1932年 ／ 2. 性別：F　　※【 】過去に従事した職業を示す
3. 職業：無職【専業主婦、裁縫内職、醤油蔵事務、経理】
4. 配偶者の職業：【自営業、会社員、醤油蔵経営】
5. 現在の家族構成：対象者のみ（2005年、夫と死別）
6. 生家について：　　※ 代表的時期のものを記載

・6-1. 当時の家族構成：対象者・両親・弟4・祖父
・6-2. 祖父母や両親の職業：教師（両親）、農業（祖父）

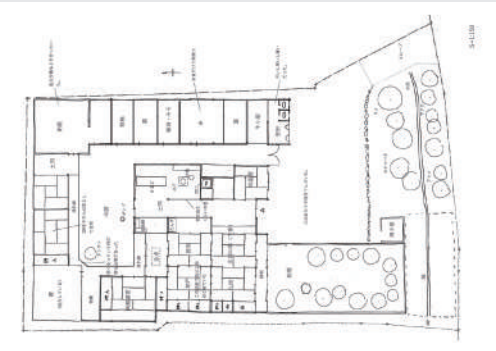
（3）住居遍歴

1. 経験住居数：6（子供期 1 ／独身期 0 ／既婚期 5）
2. 居住地：兵庫・大阪 *　　* 最も長く住んだ居住地を示す
3. 住居遍歴一覧　※ 住経験レポートから転載する

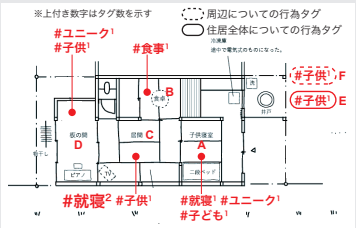
1932 年　兵庫県加古川市八幡村下村の木造戸建住宅【住居1】にて出生。
1935 年　1 弟 生まれる。
1936 年　2 弟 生まれる。
1942 年　3 弟 生まれる。
1946 年　4 弟 生まれる。
1957 年　結婚のため、兵庫県三木市福井の木造戸建住宅（夫の実家）【住居2】に転居。
1960 年　1 女誕生。夫の転職のため、大阪府和泉市府中町の木造長屋（社宅）【住居3-1】に転居。
1962 年　1 男誕生。
1965 年　板の間を増築。【住居 3-2】
1968 年　手狭だったため、1 男の小学校入学に伴い大阪府堺市（北区）新金岡町の団地（府営住宅）【住居4】に転居。
1973 年　持ち家を探しており、大阪府堺市（北区）新金岡町の団地（分譲）【住居5】を購入、転居。
1980 年　1 男、大学進学のため家を出る。
1984 年　1 女、結婚のため家を出る。
1987 年　1 男、就職ののち 1 年の社員寮生活を経て大阪勤務になったため戻ってくる。
1996 年　1 男、結婚のため家を出る。
2005 年　夫、亡くなる。
2012 年　高齢のため家族の近くで住むことになり、大阪府堺市南区赤坂台の団地（1 男の持ち家）【住居6】に転居。

（4）各住居の間取りと行為

▼住居1：・・・・・・・・・・・・



▶住居2：・・・・・・・・・・・・
▶住居3-1：・・・・・・・・・・・・
▼住居3-2：1965〜68年（33〜36歳）、兵庫県三木市／木造平屋建／築約20年／借家（社宅）／対象者・夫・1 女・1 男



▶住居4：・・・・・・・・・・・・
▶住居5：・・・・・・・・・・・・
▶住居6：・・・・・・・・・・・・

（5）行為タグによる住経験単位の抽出

▼# 食事

住居	#	住経験単位 [場所]	[属性] （評価）は省略
1	22	中庭に面した部屋	食卓を置いていた
2	55	台所に面した板の間	食事は…食卓を置いてとっており 11 人全員で食べることはほとんどなかった
	56	仏間	正月など行事の際は…集まって食べた
	57	次の間	正月など行事の際は…集まって食べた
	58	-	食事は義姉が作ることが多かった
3	84	二畳間	【座卓で】食事していた
4	106	ダイニング	朝と昼は…食卓で（食べていた）
	107	居間	晩は…折り畳みテーブルを広げて食べていた
5	137	ダイニング	朝と昼は…テーブルで（食べていた）
	138	居間	晩は…【座卓で】食べていた
	139	六畳間	晩は…【座卓で】食べていた
	187	居間例	食事や団欒をする
	192	-	食事中もテレビを見ていたし子供たちの好き嫌いを注意することもなかった。
6	161	ダイニング	食事はテーブルでとっている
	162	【ダイニングの】食卓の椅子	食事以外の時間も…にいることが多く、読書やクロスワードをしている

【 】：本表のため簡略による補足・省略

▼# 接客

住居	#	住経験単位 [場所]	[属性]	[評価]
1	16	向座敷	女中さんが泊まる際は…寝てもらっていた	
	20	北側に渡る濡れ縁	飛び移る必要があった	
	43	[濡れ縁に]面した部屋	寝ていた｜よく寝られたと今になって思う	
2	48	醤油蔵	職人さんが 6 人くらい通いで来ていて、夫ともに…作業していた	

▼# イベント

住居	#	住経験単位 [場所]	[属性]	[評価]
2	56	仏間	正月など行事の際は…集まって食べた	
	57	次の間	正月など行事の際は…集まって食べた	
	58		食事は義姉が作ることが多かった	
3	84	二畳間	【座卓で】食事していた	

▼# 使わない

住居	#	住経験単位 [場所]	[属性]	[評価]
2	56	仏間	正月など行事の際は…集まって食べた	
	57	次の間	正月など行事の際は…集まって食べた	
	58	-	食事は義姉が作ることが多かった	
3	84	二畳間	【座卓で】食事していた	
4	106	ダイニング	朝と昼は…食卓で（食べていた）	

▼# 就寝

住居	#	住経験単位 [場所]	[属性]	[評価]
1	16	向座敷	女中さんが泊まる際は…寝てもらっていた	
	20	北側に渡る濡れ縁	飛び移る必要があった	
	43	[濡れ縁に]面した部屋	寝ていた｜よく寝られたと今になって思う	
2	48	醤油蔵	職人さんが 6 人くらい通いで来ていて、夫ともに…作業していた	
	61	玄関横の棚	醤油瓶を並べていた	
3	96	-	長屋のコミュニティ以外は農家や地主が多く肩身が狭かった	
4	111	家の前	ソファが邪魔になるので…出していた	
5	127	-	模様替えが好きで家具をよく動かしていた	

▼# ユニーク

住居	#	住経験単位 [場所]	[属性]	[評価]
1	16	向座敷	女中さんが泊まる際は…寝てもらっていた	
	20	北側に渡る濡れ縁	飛び移る必要があった	
	43	[濡れ縁に]面した部屋	寝ていた｜よく寝られたと今になって思う	
2	48	醤油蔵	職人さんが 6 人くらい通いで来ていて、夫ともに…作業していた	
	61	玄関横の棚	醤油瓶を並べていた	
3	96	-	長屋のコミュニティ以外は農家や地主が多く肩身が狭かった	
4	111	家の前	ソファが邪魔になるので…出していた	
5	127	-	模様替えが好きで家具をよく動かしていた	
5	194	-	模様替えが好きで、居間一人でいるときに大きめの家具を動かすこともあった	

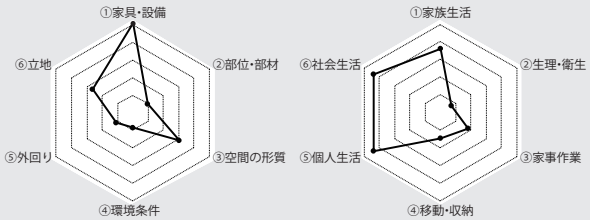
▼# 子ども

住居	#	住経験単位 [場所]	[属性] （評価）は省略
1	22	中庭に面した部屋	食卓を置いていた
2	55	台所に面した板の間	食事は…食卓を置いてとっており 11 人全員で食べることはほとんどなかった
	56	仏間	正月など行事の際は…集まって食べた
	57	次の間	正月など行事の際は…集まって食べた
	58	-	食事は義姉が作ることが多かった
3	84	二畳間	【座卓で】食事していた

（6）住経験単位を用いた量的分析

1. 対象テキスト文字数：約 6,900字
2. 住経験単位総数：221、うち 空間情報 196（89%）、生活情報 25（11%）
3. 対象者の関心傾向

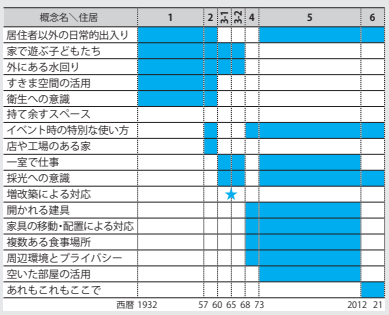
【住環境の構成要素】　　【生活行為】



4. ［評価］情報を加味した関心傾向

【住環境の構成要素】　　【生活行為】

（7）特徴的な住経験



（8）カルテ制作者による所見

・・・・・・・・・・・・

質問はごく簡易なものとして，５段階評価による回答と自由なコメントを求めた（**表 6-1**）。①②は量的・質的分析結果と対象者の自覚的認識との一致の程度を，③は対象者の自覚との間に重大な齟齬がないかを，④は対象者が自覚していない（または的はずれな）結果の有無を，⑤は本研究の問題設定に対する対象者の考えを，それぞれ確認するものである。

回答は全体として，対象者にとって新たな発見は無いものの，分析結果は対象者の自覚する住経験を適切に表しているという評価を示すものであった。回答とあわせて，質的分析結果について「結果には出ていない住居でもその経験は当てはまる」というコメントがあった。また⑤については,「特に，広い住居で家事などに苦労した経験があることで，団地暮らしでもある程度満足して過ごせたのだと思う。周りには広い家に憧れる人もいたが，そういった思いはなかった」という，住居１での〈持て余すスペース〉という経験が，その後の住宅の評価基準に影響していたという主旨のコメントが添えられた。

7. まとめ

本研究では〈住経験インタビュー〉の成果として制作された，テキスト情報および間取り図を含む〈住経験レポート〉を素材とし，インタビュー対象者の住経験の特性や傾向をわかりやすく要約した〈住経験カルテ〉を作成する手法の検討・開発を行った。具体的な成果は以下のようである。

①〈住経験単位〉を［場所］［属性］［評価］に関する情報の組み合わせとして定義し，テキストとして記述された住経験を切片化し量的分析を可能とした。

②住経験単位の［場所］と間取り図とを紐付けるとともに,［属性］が含む行為に関する情報を〈行為タグ〉を用いて抽出し，間取り図上に統合する手法を提示した。これによって，過去の住居における生活概要と空間構成との関係を間取り図で概覧することができる。また，行為タグを用いた特定行為の記述抽出は,生活習慣の確立・変遷プロセスの考察を容易とする。

③対象者の住環境と住生活に対する関心の傾向を，住経験単位を用いて定量的に評価および可視化する手法を定式化した。分析サンプル数が少ない点には注意はいるが，対象者の背景に起因する個人差をおおむね適切に抽出することができた。

④M-ＧＴＡを用いた質的分析により特徴的な住経験の概念を生成する手法を定式化し，レポート 27 編を対象に試行した。対象者ごとに抽出された住経験の概念リストは対象者の住経験の特性の要約となり，住居履歴と対応させることで時間軸を考慮した考察も容易となる。

⑤住経験カルテの全体像を試作した。また，内容の一部について対象者自身の評価を確認し，対象者の住経験を適切に要約しているとの肯定的な評価を得た。

表 6-1 対象者（EB03）による分析結果への評価

設問	回答 *
① 結果は自身が住環境を評価する際の着目点と一致している	4
② 結果は自身の住経験（の特徴）を要約していると感じる	5
③ 結果に表れていない自身が重要だと考える経験がある	2
④ 結果に自身にとって意外な（自覚していない）ものがある	2
⑤ 住経験が住居観に影響を与えていると感じる	5

* 回答の選択肢：1 まったくそう思わない / 2 あまりそう思わない / 3 どちらともいえない / 4 ややそう思う / 5 とてもそう思う

住経験カルテは，あくまで住経験の特性・傾向の大まかな要約であり,「対象者の住居観は○○である」と断定的な結論を示すものではないが，その内容は，対象者の住環境および住生活に関する嗜好や習慣,関心,考え方，すなわち「住まいと生活に関する価値判断基準の体系」としての住居観を，色濃く読み取ることができるものとなっている。

本稿では分析手法の構築と試行に重点を置いたため，分析に用いたサンプルが少数であった。より多くのサンプル分析を通じて手法の妥当性を確認しつつ，分析の精度および効率性を向上させることが当面の課題となる。また，住経験単位に含まれる［評価］を加味した分析を十分に行うことができなかった。研究の次段階である新規の住宅計画時の活用や複数対象者間の比較にむけて，検討すべき重要課題の一つである。なお本稿では立ち入らなかったが，分析対象テキストの内容には，対象者だけでなく聞き手の関心や聞き取り技術の巧拙，記述の丁寧さといった，聞き手側の要因が少なからず影響していると考えられる。本研究の手法が構造的に内包する問題として，別途詳細な検討を要することを付記する。

＜謝辞＞

本研究は、著者らの勤務校を中心とする各大学・高専の学生諸氏およびその両親・祖父母の協力のもと行われた，一連の住経験インタビューの成果なくしては成り立ち得なかった。研究資料としての利用に快く同意いただいたこととあわせて、記して謝意を表したい。

＜注＞

1) 例えば中島ら（文献2，p.41）は、「住居観は社会的文化相に基づき直接的には住に関する体験的経験と知識的・認知的経験とによって形成…。この体験は一般的に居住歴として表現される…」と、住居観と住経験の関係を規定している。
2) 1編の住経験レポートに含まれるテキスト量は数千字～2万字超，間取り図の数は経験した住居数に応じて数点～20 数点程度である。間取り図は縮尺およそ 1/100～150 で，部屋の配置構成，室名（当時用いていた呼称），建具や開口の位置，家具の配置，注釈などが記載される。表現方法や記載の密度，正確さには，レポートによってばらつきがある。
3) 住経験レポートは,完成後すみやかに個人を特定しうる記述を削除する匿名化処理を施し,個人情報にあたらない状態とした上で研究資料としている。住経験インタビューの取り組みは，この他にもプライバシーの尊重，研究利用に関する事

前同意など，様々な慎重な配慮の元で実施されている。

4) 住経験レポートの各パートの内容に関する詳細は，文献 12 を参照されたい。

5) インタビューがおしなべてそうであるように，語られた住経験には，曖昧な記憶による勘違い，誇張や美化が含まれるかもしれず，説明はしばしば舌足らずである。しかし住経験と住居観の特性把握にあたって重要なのは，その住まいが対象者の心の中でどのように記憶・評価されているかであり，その意味において本研究では，記述の客観的な正確性に関する検証を留保する。

6) その経験が生じた経緯や文脈を含めた詳細な理解にあたっては，当然レポート本体を確認する必要がある。行為タグの主要な役割は，分析者の知りたい事項に関する要点を抽出・概覧するためのインデックスとしての機能である。

7) 関心傾向については，今回は住環境と住生活に視点を限定したが，家族間の関係や近隣関係，プライバシーへの意識といった，人間関係を分析項目として設定することも可能である。

8) 住環境の構成要素の分類は様々考えられるが，ここでは内外の空間の別やスケールに応じた直感的な理解のしやすさを優先し，文献 18 等を参照し設定した。

9) 生活行為についても，建築計画学や住居学分野において様々な分類の試みがあるが，ここでは最も一般向けに簡略化されたものとして，中学校家庭科教科書（文献 19）に採用されている当該分類を用いた。

10) M-ＧＴＡは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ Modified-Grounded Theory Approach の略。本研究におけるM-ＧＴＡの手法は，基本的に文献 20 に基づく。住経験の質的分析手法としてM-ＧＴＡを用いる理由は複数あるが，最大の理由は同手法が「プロセス的特性」をもつ「人間行動の予測と説明に関する」問題を扱うものであり，また原データとしてインタビューテキストを想定した手法だからである（文献 21）。また，同手法において原データから生成する「概念」が，ある意味をもった住経験のまとまりを要約するツールとして，本研究の目的である住経験カルテの制作に適していると考えるためである。

11) 例えば，寒暑や湿度などに関するネガティブな印象記述から生成された〈温熱環境への不満〉を，対極例であるポジティブな印象をも説明できるように定義を拡張し，〈温熱環境への意識〉に変更する等。

12) 匿名化した住経験レポートには，関係者を特定できないよう英数字からなる管理コードを付与し，対象者およびそれに関連したデータの識別情報として用いている。

＜参考文献＞

1) 柳沢究：住経験論ノート(1) 住まいの経験を対象化するということ，traverse 新建築学研究，no.19，pp.26-31，2018

2) 中島喜代子・上林博雄：住居観研究の枠組みと住居観型の仮説検証の試み；住居観に関する実証的研究，日本建築学会計画系論文報告集，No.360，pp.39-48，1986

3) Kolb, D. A.: Experiential Learning; Experience as the Source of Learning and Development, Prentice Hall, 1984

4) 西山夘三：住み方の記，文藝春秋新社，1965

5) 多木浩二：生きられた家，田畑書店，1976

6) 鈴木成文：住まいを語る；体験記述による日本住居現代史，建築資料研究社，2002

7) 仙田満：こどもと住まい；50 人の建築家の原風景（上・下），住まいの図書館出版局，1990

8) みねぎしやすお：「私とすまい」の履歴書；一建築家の昭和史，建築資料研究社，1996

9) 宮田智大・宇杉和夫・稲葉修：幼少時の住宅居住体験評価と自己の将来の住宅空間の方向性に関する研究，日本建築学会計画系論文集，No.595，pp.1-7，2005

10) 刀根令子・浅見泰司：居住者の価値観と住環境履歴が将来の住環境選好傾向に及ぼす効果，日本建築学会計画系論文集 No.616，pp.23-30，2007

11) 柳沢究・水島あかね・池尻隆史：住経験インタビューのすすめ，NPO 西山卯三記念すまい・まちづくり文庫，2019

12) 柳沢究・水島あかね・池尻隆史：建築学生による親の住経験のヒアリング，日本建築学会大会学術講演梗概集（建築計画），pp.1373-1374，2018

13) 新津春佳・柳沢究・水島あかね・池尻隆史：住居遍歴のパターンとライフステージの関係，日本建築学会大会学術講演梗概集（建築計画），pp.1103-1104，2019

14) 柳沢究：住経験論ノート(2) 親の住経験をインタビューすること，traverse 新建築学研究，no.20，pp.112-117，2020

15) 野間有朝・柳沢究：日本在住外国人の住経験から見る日本の住環境への適応プロセス，日本建築学会近畿支部研究報告集（計画系），第 60 号，pp.125-128，2021

16) 伊藤航平・柳沢究：「住み方調査」研究の時代的変遷，日本建築学会近畿支部研究報告集（計画系），第 60 号，pp.129-122，2021

17) 内田隆介・柳沢究：nLDK型住宅に暮らす家族の住経験から見る就寝形態の変化とその要因，日本生活学会第 49 回研究発表大会梗概集，pp.22-23，2022

18) 彌重功：戸建住宅における愛着醸成に関する研究 その3；住まいへの愛着写真調査の分析，日本建築学会大会学術講演梗概集（F-1），pp.1385-1386，2010

19) 佐藤文子ほか：新しい技術・家庭 家庭分野；自立と共生を目指して，東京書籍，2020

20) 木下康仁：定本M−GTA；実践の理論化をめざす質的研究方法論，医学書院，2020

21) 木下康仁：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の分析技法，富山大学看護学会誌，6(2)，2007

＜研究協力者＞

大池岳，大野真太郎，陰山皓平，上遠野洋明，木村駿介，久保由香子，小森幸，佐武真之介，高見優菜，寺下響，唐頴，中島佑太，野川瑛統，野田一子，安井葉日花（敬称略・50 音順）